

魯の哀公、仲尼に問いて曰く、衛に悪き人あり、哀駘它と曰う。丈夫のこれと処る者は思いて去ること能わず。婦人のこれを見て、父母に請いて、人の妻と為らんよりは寧ろ夫子の妾と為らんと曰う者、十数にして未だ止まず。常に人に和するのみ。人の死を濟うなく、人の腹を望すなし。知は四域より出ず。寡人召してこれを觀るに、果たして悪きを以て天下を駭かす。寡人と処るに、其の人と為りに意あり。期年に至らずして、寡人これを信ず。寡人国を伝えしに、汜若として辞す。幾何もなくして、寡人を去りて行く。与にこの国を楽しむ者なきが若し。これ何人なる者ぞと。

【大体の意味内容】

魯の哀公が孔子にたずねて言った、「衛の国に大変な醜男がいて、その名を哀駘它といった。彼と一緒に過ごす男たちは、彼を慕ってそのそばから離れることができなくなる。女性たちは彼を見ると、父母に願い出て、『他人の正妻になるよりは、あの人の側女になりたい』と言う者が何十人も現れて止まらない。（彼は自分の考えを主張することなく、）いつも他人に同調しているだけである。（君主のような力をもって）人の死を救うこともなく、（財産をもって）人々の飢えを満たしてやるというわけでもない。その知識も国内のことに限られている（のに、多くの人々に慕われるのは、きっと常人とは違ったところが彼にあるからだろう）。私は召し寄せて彼に会ってみたが、はたしてその醜いこと、世界を驚

かせるのに十分なほどであった。しかし私は彼と一緒にいると、(ひと月もたたないうちに) その人となり(ひと)に心惹かれるようになった。一年もたたないうちに、私はすっかり、彼を信じ切れるようになった。(国に宰相がいなかったのも、私は哀駘它に国を任せようとしたが、彼は遠くを眺めるような様子で辞退した。それからいくらかもたたないうちに、私のもとから立ち去ってしまった。(私の喪失感は大きく、) もはやこの国(くに)でもともに楽しく生きるべき相手がなくなったように思われた。これは一体、何ものであるうか。」

醜男でアイドルの哀駘它シリーズ第1回(たぶん4回シリーズ)。

「世界を驚かせるほどの醜男」なのに、女にモテる、ちょっと、興味を持ってしまつてくるですよ。しかも権力や金もなく、特別頭いい、という感じでもない。なのに男にも女にもモテる。確かに、いったいどんな奴なんだと、気にせずにはいられません。その解答は次回に回すとして、醜男なのにモテるといふ人物として、クラウス・キンスキーといふ俳優(俳優)に、少しだけ触れてみたいと思います。

彼は道徳的には大いに問題があるので、称賛することはできませんが、まるで怪物の様な醜男であるにもかかわらず、なぜか美女たちに人気があったということもまた事実なのです。娘で女優のナスターシャ・キンスキーは、映画『テス』や、『哀愁のトロイメライ(クララ・シユーマン)』などで大ブレイクした超絶美女ですから、その母親(つまりクラウスの奥さん)もいかに美女だったかは想像に難くありません。

このクラウス・キンスキーは、哀駘它とはむしろ真逆で、自己主張や欲望の権化のような人物で、人間が持っている業の深さを極限まで表現したような男です。ケダモノの個性と風貌なのですが、だからこそ異様異風なる者の色気を放つ、というわけらしい。彼自身による監督・主演の『パガニーニ』では、天才音楽家の破天荒な生涯を描いているようで、実は自分自身への断罪を下しているかのようにも見えました。

『莊子』では、何らかの「取柄(長所)」も何も全くない醜男が、一國の王までも虜にしてしまつという風に描かれています。どうしても実話とは信じられない、作り話だろうと思つてしまつたのですが、およそ2千年もの長きにわたって読み継がれてきている書物ですから、何か人々にとって説得力があるのでしょうか。自分の思い込みとか常識が粉碎されるかもしれない、それ

て、ある意味楽しいことであるし、読書の悦びとなるかもしれません。



クラウス・キンスキー (父)



ナスターシャ・キンスキー (娘)